



砲丸投げに先生が抱かれる

高校のころは、クラス全体で男子は親しかった。

クラスの中心的存在の俺が、大勢でどんちゃん騒ぎするのが好きだったことや、垣根を作ったり誰かを仲間外れするのを良しとしなかったからだと思う。

俺はクラス全員の名前を知って顔も覚えていたし、クラスの男子で口を利いたことのない奴はいなかった。

まあ、といっても、よくつるむ奴、一、二度しか言葉を交わしたことがない奴と親交の差に程度はあつて、そいつは後者。

一見、地味で控えめだったから、常にクラスの中心にいて賑やかしていた俺と接点があまりなかったけど、冷房のきいた教室に行くときにひざ掛けを持参するなど、ちよいちよい目に留まることがあり、時々、話の種になるような奴だった。

そうやって変り者の片りんを見せていた、そいつが日の目を浴びたのは、くすぐり我慢大会をしたときだ。

誰かが誰にもなく、くすぐりだしたのがきっかけで「誰が一番、平気な顔でいられるか競おう！」ということになった。

こんな不毛で馬鹿げた競い合いは望むところ。「審査員五名、くすぐり要員三名、押さえつけ要員二名を交代でやりながら、クラスの男子全員参加すること！」と早速、俺は命令をくだした。

くすぐられる奴の逃亡防止策として、人垣で囲むように指示。

さらに「股間や乳首などはNG、器具使用は三つまで、制限時間は一分！」と細かいルールも決めていった。

高校生にもなれば、ある程度、性の知識がついて体が成熟しているし、なんといったって、女子の目があるとったら、男として、みつともないざまは見せられないというもの。

意地になって堪えるだろうから、笑いこけて床をのたうち回るなんて、満点な反応を見られるとは、端から期待はしていなかった。

顔を茹蛸にしたり、頬を膨らませたり、目を剥いたり、体を震わせたり、太ももをつねったり、指を噛んだり、奮然と堪えているさまも、それはそれで間抜けで、大いに囃したてて笑いこけたものを、そいつ

の場合は違つた。

ひ弱そうで大人しい奴だったからか、くすぐる要因が遠慮がちに手を伸ばしたのだけど、とたんに「ひゃあつ！」と跳びあがるようにして、しよっぱなから甲高く鳴いたのだ。

それまで、低い呻きしか聞けなかったのに比べて、あまりにあつけなく、女のような悲鳴があがったものだから、男子らは皆、呆気にとられ、それいつも脇腹を抱えて驚いているようだった。

そうして時間が停まったように、静まり返つたのはほんの間だけだ。

格好の餌食を見つけたとなれば、くすぐり要員は俄然、鼻息を荒くしてにじり寄り「やめて！」と逃げだしたのを、押さえつけ要員が追いかけて、円で囲む連中が「だめだめ！」「ほら、ちゃんとしなさい！」と

行く手を阻んだ。

囲いにはじき返されて、押さえつけ要員に捕まり、万歳の格好をさせられたまま、くすぐり要員の六つの魔の手が伸びて。

色白の肌を真っ赤に染めあげ、涎と涙を滴らせて「ひやつ！やめて！やめて、つたら！」と体を痙攣させ、いちいち切羽詰まった悲鳴をあげる。

なんて、文句なしのナイスリアクションをされれば、くすぐり要員は煽られるまま「ここかな？」「ここかな？」と体中を、手やペンでつき回すというもの。

普段、教室の隅っこを指定席にしているような奴が、表舞台にひっぱ

つてこられ、こうも大活躍してみせると、ギャップも覚えて尚更、喝采したくなるのだろう。

そりゃあ、男子らは腹を抱えて笑いながら、散々、ひゅーひゅーと囁して、煽り立てていた。

教室には女子もいるというのに、男子らはどこまでもヒートアップして、制限時間一分をはるかに過ぎて、熱狂しつづけた。

正直、イジメか遊びかのぎりぎりのラインで、いつもなら俺が場を盛り下げないように待ったをかけるところ、あいにく、両拳を握りしめ奥歯を噛みしめるのい精いっぱいだった。

少しでも気を抜くと、勃起しそうだったから。

ついには、そいつが膝から崩れ落ちて、ひーひーと呼吸困難に陥って突っ伏したなら、さすがに「もういいだろ」「十分だろ」と助け起こす奴がでてきて、予鈴もなったことで、お開きとなった。

次の授業が、鬼のような教師による指名地獄の数学でよかった。

そうでなければ、男子は興奮を持って余して、教師の目を盗んでちよっかいをかけていたかもしれない。

涙目で堪えるそいつを見たら、俺は勃起していたかもしれない。

鬼教師が授業最後まで目を光らせてくれたおかげで、男子らは変な気を起こさなかつたし、俺もすっかり萎えた。

数学の授業が終わった後は体育で、移動や着替えて慌ただしかったこ

ともあり、誰もそいつに見向きもしないで、さつさとグラウンドへと向かった。

俺もそれに交じって、マイペース着替えるそいつを、見ないようやり過ぎした。

六時間目の体育となればハイテンションにもなり、サッカーなのに蹴ってドッジボールをするなど男子らと馬鹿騒ぎをして、息つく間もないように、放課後の陸上部の活動に勤しみ、がむしやらに砲丸を放りつづけた。

帰路につくころには、息も絶え絶えで体がだるく、足がふらついていたけど、帰宅したら飯を食ってシャワーを浴び、失神するように眠って、恐れていた夢精をすることもなかった。

翌日、そいつに寄ってくる奴が、くすぐろうとしないか監視し、目についた分にはすべて阻止して、昼休み時間にまた教室で、くすぐり我慢大会のつづきをしそうな流れになったのを、尻相撲にすり替えさせた。

で、なんとか、その日を乗りきり、部活のときにほっと息をつけて、油断したからだろうか、腕の筋肉をつらせてしまった。

保険医に見せたところ、筋肉疲労だろうとのことで「一応、医者に診てもらいなさい」と紹介状をもらった。

それを持って、グラウンドに向かおうとしていた。
そのとき。

